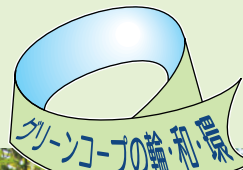




共生の時代

'09
8月

●発行:グリーンコープ共同体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



せん だい
川内つゆくさ会世話人
川内原発建設反対連絡協議会会長

鳥原良子さん

プロフィール

鹿児島県吹上町(現日置市)出身。現職は市で中学校家庭科教諭を経て結婚後3年間小学校教諭として勤務。1982年夫の転勤に伴い、出水市へ転居。「母と女性教職員の家」の地域ミニグループで原発問題を学ぶと同時にグリーンコープの活動をはじめ。2003年〜2008年、グリーンコープかごしま生協の理事長を務める。家族は、夫と、転勤で自宅通勤になったばかりの長女の3人、猫2匹。薩摩川内市在住

「原発」も「食べもの」も大切な生命の問題

「薩」

薩摩川内市はいいところだね。ただ原発があるからね。そんな言葉を耳にすると、じっとしてられないと鳥原さんは言う。

今年1月、川内原発増設の正式申し入れが電力会社から鹿児島県と薩摩川内市にあった。「ボヤボヤしていたらできてしまう。何としても止めないと」。県内外の団体やグループ・個人と共に、陳情書の作成や提出、署名やチラシ配布などの街宣活動、議会付託の委員会傍聴、説明会・公聴会への参加など、寝る間も惜しんで駆けずり回る。

「大隈半島では志布志湾開発問題一色だった。薩摩半島で起きていた原発問題は知らなかった。知らないって怖いと思う」。1989年、夫の郷里川内市(現薩摩川内市)への転居。すぐに地域ミニグループ「川内つゆくさ会」に参加。同時にグリーンコープの活動の中でも原発のことにについて意識的に取り組んでいく。「原発も食べもの」の問題

と同じ。放射能は食べものを汚染し、微量でも子どもの若い遺伝子を傷つける。ひとたび食品汚染が起これば、無農薬の野菜だって何の意味もなくなる。これ、普通の母親の感覚で「いかん!」と思えますよね。

おとなしかったという少女時代。教室では意見があってもなかなか言えない生徒だった。けれど正義感は強かった。高校時代、担任教師に意見したことがあった。

「先生から驚かれましたが、それで一目置かれるようにもなりませんでした。だから若い人には、どんな意見を言ってもいいんです」。かごしまの組合員は原発問題に関心している感性を持っている。運動は1人ではできない。仲間がいるから頑張れると言う。

今年5月、太陽光や風力、バイオマス発電などの新エネルギーの先進地、岩手県葛巻町を友人7人で視察した。「何よりそこに暮らす人々が前向きで、私たちも元気をもらった。原発に

反対するだけでなく、どんな街づくりをしたらいのかというモデル地に出会った。薩摩川内市をこんな街にしたい」と夢が持てた。

あふれるエネルギーの源は、双子の長男長女への愛情。7年間望み続けてやっと授かった生命だけに、何ものにも代えがたい宝物だ。かわいい孫も3人いる。この子らの生命を守りたい!そんな想いが日々強くなる。

知らない人からもよく「鳥原さん、がんばってますね!」と声をかけられることがある。応援してくれる人がいる。仲間がいる。しかし、「原発はこれ以上いらない」と思っても言えない人もいる。「どうせ反対しても無駄とあきらめないで、発信し続けるのが私たちの役目。未来のため、今、やれるだけのことは精一杯やっておかないとね!」。

「動」のイメージが強い鳥原さんの唯一の楽しみは、時々琴を弾くことだという。その眼は未来を見つめている。

2009年 自生GMナタネ調査活動によって 汚染の広がりを確認しました!



Contents

2009年度 第2回平和学習会 人びとの往来と生活から考える歴史と平和 —— 近現代日本と朝鮮半島 ——	2
うちのメーカー・うちの生産者 ⑦ 百姓倶楽部 八女の郷 「にんにく」	3
ホームレス問題を考える 5 子どもたちはなぜ、 ホームレス者を襲撃するのだろうか ～ホームレスを生み出す社会の問題点とその解決に向けて～	4・5
～グリーンコープのこだわり再発見～ グリーンコープの店舗 地域の中にグリーンコープを発信する拠点	6
広がる「民衆交易(ネグロス)バナナ」の栽培 ～「生きるため」から「自立するため」へ～	7

5月、1年ぶりに愛知県の実家に顔を出した。70代半ばになる両親に笑顔で迎えてくれたのをいざこに、甘えて終日遊んだ。父がある用紙を私に見せた。それは町内対抗ソフトボール大会のメンバー表。「ここ」と指差す。見ると投手欄に父の名が。「エーッ! 投げられるの? 他にいないの?」と思わず叫んだ。「高齢者はかり若いモンはいない。いても忙しく、行事への参加がない! 元気な年寄りややるしかない!」と得意気に話した。振り返ると、私が高校時

送 信

代から父は投手をしていたのは。あれから「うん十年」経過して、未だに父の名が挙がっているとは。超高齢化と分かっていたが、現実を実感した。同時に、今でもスポーツ交流が継続され、高齢者も元気に暮らせる地域となっているなと思った。父は「今年こそ優勝だ!」と意気込んでいた。怪我なく頑張つて、と声をかけ、町内の人々の支えに感謝しながら帰路に着いた。

グリーンコープ生協くおか理事長
田原 幸子

第2回 平和学習会

2009年度

グリーンコープ共同体 組織委員会主催

人びとの往来と生活から考える歴史と平和

近現代日本と朝鮮半島

6月30日・福岡市
参加者109人

人の移動から

見えてくる歴史

近現代における日本人の海外移住と、朝鮮人の朝鮮半島外への移住の推移に注目してみると、日韓の歴史の一端が見えてくる。日本人が移民として海外へ渡りはじめたのは1868年以降。移住先は主にハワイだ

1876年になると、日本は不平等条約を朝鮮と締結。それは、輸出入に関税を

かけずに現地の穀物を買収するものだった。日清・日露戦争で勝利した日本は、次々と近隣国の植民地化をすすめ、とりわけ勢力下にあった朝鮮に向けて、多くの日本人を送り出した。こうして1900年には1万5千人程だった日本人の朝鮮在留者は、1930年には50万人規模にまで増加した(内閣統計局資料等による)。このよう

な日本人の大量移住、経済的支配の結果、朝鮮の人々は土地を追われることとなった。1910年の韓国併合を経て、生活が困窮した農民をはじめとする朝鮮人の多くが他の土地や国外へと離散。1944年までに成人人口の実に約4割もの人が故郷または祖国を離れ

ざるを得ない状況となった。これは世界のどの国の状況にも匹敵しないほどの高い比率だ。(ブルース・カミングスによる)

このように大規模な人口推移の背景には、戦時体制下での「強制連行」や「慰安婦」問題なども含まれており、多大な人権被害が行われた歴史がある。被害を受けた人びとの傷は現在も癒されておらず、現代日本において「過去の清算」はまだ終わっていないと言える。

普通の人びとの暮らしの中に生まれた差別

ヨーロッパの国はアジアやアフリカなど地理的に離れた場所を植民地化したため、植民地官僚や貿易を営

む一部の人のだけの行き来となった。一方、日本は同心円状に植民地化をすすめ、アジアの国々を支配下に置いた。その特徴として、植民地に移り住んだ日本人は、その他にも商工業者や農民まで、あらゆる階級の人々を含んでいた。

独自の植民地政策をとってきた日本は、韓国併合後36年間朝鮮半島を支配。とりわけ戦時下には、「皇国臣民の誓詞」の斉唱、神社参拝、日本語の強要、創氏改名までも朝鮮人に強い文化・社会にまで及ぶ

以上のように人の移動という観点で歴史を振り返ると、国家の政策や戦争がもたらす対立や差別が、市井の人々にまで及びつついったという事実が見えてくる。地域の間関係をも

平和実現への第一歩は地域からはじまる

※現シカゴ大学歴史学部教授。朝鮮半島を中心とする東アジア政治を研究し、朝鮮近現代史研究に大きな影響を与えた。著書に『北朝鮮とアメリカ確執の半世紀』(明石書店刊)

の関係性があらわになった。震災直後、労働者力として日本国内に増加していた朝鮮人が暴徒化するという事実無根のデマが飛び交った。軍や警察に加え、デマに感化された各地の庶民からなる自警団らによって6千人を超える朝鮮人、中国人らが虐殺された。この事実を日本政府ではいまだに公的な歴史の記録として認めず、時間と共に風化しようとしている。

ばみ、ふるさとの記憶すらも分断してしまう悲劇を生み出すことにもなる。離散した朝鮮人たちの生活は、目に見えない戦争被害の象徴である。

このような歴史を、私たちは我が身に引き寄せ、考えていかなければならない。好転しつつある日韓の関係においてもまだ課題は多い。今ここで改めて、私たちは過去を見据えて交流をすすめるなければならない。人権や真の平和の追求は、決して外圧によって推しすすめられるものではなく、地域における実践が不可欠だ。私たちが生活する地域での実践の積み重ねが、必ずや他地域や他国で取り組みを続ける人々との出会いを絶えず生み出し、やがて国際的な連帯へと発展していく可能性をもっている。グローバルゼーションとは、こうした実践からこそ、実感されるものではないだろうか。

グリーンコープは、平和の取り組みの一つとして、日本と韓国の歴史について学び、「平和」の意味を考えてきました。そこで学んだことを検証するために1996年から「ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋)韓国への旅」に取り組んできました。昨今の韓流ブームなど、日韓の交流はすすんでいるかに見えます。しかし、共に連帯して未来をつくっていく仲間として、互いの歴史を踏まえた上で交流していくことが課題です。

今年度は小林知子さんを講師に迎え、「人びとの往来と生活から考える歴史と平和」という演題で近現代の歴史について学びました。



講師 小林 知子さん
福岡教育大学 国際共生教育講座准教授
国際関係学(近現代東アジア国際関係史、朝鮮研究・在日朝鮮人史)を専攻。論文として『未決の帝国解体』(『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第4巻・岩波書店)



▲抗日運動(独立運動)を行う韓国人が監禁された、西大門刑務所記念館を視察する「ピョンファ・エ・ダリ韓国への旅」参加者(2008年度)

▲独立記念館の入口には高さ51mの巨大モニュメントがある。「民族の塔」と呼ばれ、民族の自主・自立、南北の統一を望む強い意志を表わしている



▶参加者から講師への質問も活発に行われた

近現代の日朝関係に関する主な事項

- | | |
|-------|--|
| 1875年 | 朝鮮半島江華島付近で、日本と朝鮮が武力衝突(江華島事件) |
| 1876年 | 日朝修好条規締結、朝鮮にとって実質的な不平等条約となる |
| 1894年 | 日清戦争はじまる |
| 1894年 | 朝鮮王朝をめぐり日本と清国が対立 |
| 1904年 | 日露戦争はじまる |
| 1904年 | 朝鮮半島と満州南部が主戦場となる |
| 1904年 | 日韓議定書締結、大韓帝国の財政・外交に顧問を置き、日本政府と協議することを義務づける |
| 1910年 | 「韓国併合ニ関スル条約」強制締結 |
| 1923年 | 関東大震災直後、日本人自警団により、在日朝鮮人や中国人らが大量虐殺される |
| 1937年 | 日中戦争全面化 |
| 1938年 | 朝鮮教育令を改正して、朝鮮語の授業を実質的に禁止 |
| 1940年 | 朝鮮で創氏改名を実施 |
| 1941年 | 太平洋戦争はじまる |
| 1945年 | 日本敗戦により朝鮮が植民地支配から解放される |
| 1948年 | 済州島4・3事件 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国成立 |
| 1950年 | 朝鮮戦争はじまる |
| 1965年 | 日韓基本条約に調印 |



植え付けした唐辛子畑で。左から松尾高生さん、松尾晃治さん

産直 にんにく

産直 にんにくの芽

冷凍国産 にんにくの芽



2008年の中国産冷凍餃子の中毒事故を受けて、さらに国産の安全な食べものが市場にも出るようになり、にんにくやにんにくの芽も国産のものが求められるようになった。

八女の郷では10年程前から無農薬でにんにくの栽培に取り組んできた。2008年には、産直にんにくの栽培過程で収穫できるにんにくの芽を凍菜で供給できるようになった。にんにく栽培について、代表の松尾高生さん、従弟で共に生産現場を守る松尾晃治さんに話を聞いた。



父の遺志を引き継いで

「ふーつと右肩が重くなる時があつて、そんな時おやじの存在を感じるんです」。突然大黒柱を失つてその重責に押しつぶされそうになる高生さんを今でも亡き父が支えてくれている。昨秋、にんにくの植え付けを終えた日、予期せぬ病が高生さんの父、高嘉さん(前代表)を襲った。後継者として頼もしくなつていく息子たちに「八女を九州の田子町(青森県にある日本一のにんにく生産地)」という夢を託しての死だった。

「おやじがやっていた農作業を手伝ってはいましたが、施肥ひとつとってもその方法が分からず、仲間に助けてもらいました。それでどうにか収穫までたどり着いたところです」と高生さんはこの半年を振り返る。丸々と実太りしたにんにくがコンテナに積み上げられて出荷を待っていた。

父の背中を見て育った高生さん。「好きなことをやればいい」と、家を出て大学へ進学、社会人になった。「いずれは後を継ぐ」という思いはずっと持っていたという。6年前に会の運営

や流通の担当者に。伴って高嘉さんは、本来の農作業に打ち込むようになった。「中でもにんにくにかける情熱はすこかったですね」。

「中でもにんにくにかける情熱はすこかったですね」。

4月後半から収穫まで3回程度、家族や仲間、友人知人、シルバー人材の人まで総動員となる。

な食べものを求めている、父たちが築いてくれたノウハウや人と人とのつながりもあり、とても恵まれています」と高生さん。「父の口癖は、物は売るな、人を売れ。金儲けより、人儲け」。農業には人がつながり、フィールドが広がっていくおもしろさがある。そうやって周りの人が元氣になつていくのが醍醐味でもある。「若い人に、農業に夢があることを知ってもらいたい」と1年半前に伯父高嘉さん一から農業を教えたもつた晃治さんは、「いろいろ考えさせながら任せてくれ、最後はカバールしてくれました。それが自分にとってチャンスだった」と感謝している。

にんにくを無駄なく利用する

市販されている冷凍にんにくの芽は、芽を収穫するための品種。中国産がほとんどだ。かつては、グリーンコープも中国産を取り扱っていた時期があった。しかし、「国産の冷凍にんにくの芽がほしい」という組合員の声が高まり、中国産の企画を中止。それを受けて、高嘉さんが青果用だけではなく、冷凍用のためににんにくの栽培面積を増やしていたのだった。

「産直にんにくの芽」と「冷凍国産にんにくの芽」は、にんにく栽培の副産物だ。にんにくを栽培する過程で出てくる芽を摘むことでにんにくは丸く玉太りする。また、にんにくの芽を摘み採る時は、にんにくを傷めないように一つひとつ手で摘まなければならない。

生産したものを無駄にしないという生産者の思いと、それに共鳴した生産者同士の連携、それを商品化するという加工メーカーの思いが重なって、2008年誕生の「め冷凍国産にんにくの芽」に結実した。

高齢化がすすむ八女を農業で活性化させたいという2人の願いは、さらに唐辛子、ヨモギといった新しい作物の栽培へと向かっている。

にんにく栽培の1年

9月 土作り
水はけのよい砂地が適している。堆肥をすきこみ、畝と畝の間までマルチを張る

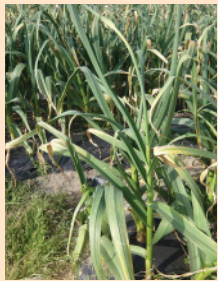
10月 植え付け
にんにくを一片(鱗片)に分けて、15～20cm間隔で一つひとつ手で土の中に埋める

生育過程
約20日～1ヵ月で茎が伸び、葉が出てくる。お湿り程度の雨で生育する



2月 追肥・草取り
草取りをしながら、堆肥を撒く

4月 にんにくの芽の収穫
春の日ざしとともに出てくる新しい芽を一本ずつ手で摘む



5月 にんにくの収穫
芽の収穫が終わったものからトラクターで掘りあげる



出荷作業
にんにくの茎と根を切り、プラスチックでこする

6月 乾燥
乾燥機で2週間くらいかけてしっかり水分を飛ばす



るのだろうか？ 点とその解決に向けて～

事件は1983年2月5日、横浜市で起きました。山下公園で野宿生活をしてた須藤泰造さんが市内の少年ら(14～16歳)10人から、殴る、蹴る、拳でゴミかごに入れられ引きずり回されて死亡。それは「横浜浮浪者殺傷事件」として、社会に衝撃を与えました。それ以降、子どもたちによるホームレス襲撃事件は後を絶ちません。北九州ホームレス支援機構の調査でも37%のホームレス者が何らかの被害にあったという結果が出ています。

子どもたちがなぜホームレス者を襲うのか、その背景には何があるのかを、14年前からその問題に関するルポを続けている北村年子さん、NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長奥田知志さん、グリーンコープ共同代表理事田中裕子さん、三者による鼎談をとおして、考えてみます。

ホームレス襲撃といじめは、 社会的な問題

奥田 1983年の事件の被害者は、「浮浪者」日雇いの労働者だった。そこにあったのは下層労働者を取り巻く構造的な問題でした。北九州ホームレス支援機構も当初は、「北九州日雇い越冬闘争実行委員会」と名乗り、活動をしていました。社会の変化と共に野宿者が増加する1990年以後にホームレスの問題が社会的なテーマとなりました。私が初めて、「ホームレス問題はハウスレス問題だ」と書いたのが1992年でした。

田中 昔から確かに「浮浪者」と呼ばれる人が私たちの日常生活の中にもいましたが、無視することはありませんでした。物乞いをする人たちに物をあげたりして…。今思えば、地域の中で一緒に生きていたような気がします。

北村 私は子どもの問題取材する中でホームレス問題につながりました。いじめが社会的な問題となった契機的事件は1986年、中野区の中2年生だった鹿川君の自殺です。子どもたちの力の発散は、はじめは暴走族や校内暴力など大人や権力に向かっていましたが、その後家庭内暴力へと変わりました。

奥田 1983年の事件の被害者は、「浮浪者」日雇いの労働者だった。そこにあったのは下層労働者を取り巻く構造的な問題でした。北九州ホームレス支援機構も当初は、「北九州日雇い越冬闘争実行委員会」と名乗り、活動をしていました。社会の変化と共に野宿者が増加する1990年以後にホームレスの問題が社会的なテーマとなりました。私が初めて、「ホームレス問題はハウスレス問題だ」と書いたのが1992年でした。

田中 昔から確かに「浮浪者」と呼ばれる人が私たちの日常生活の中にもいましたが、無視することはありませんでした。物乞いをする人たちに物をあげたりして…。今思えば、地域の中で一緒に生きていたような気がします。

北村 私は子どもの問題取材する中でホームレス問題につながりました。いじめが社会的な問題となった契機的事件は1986年、中野区の中2年生だった鹿川君の自殺です。子どもたちの力の発散は、はじめは暴走族や校内暴力など大人や権力に向かっていましたが、その後家庭内暴力へと変わりました。



中裕子さん



※定まった職業や住所をもたず、うろついて暮らしていた人をいう。現在差別的な言葉として放送禁止用語になっている。現在は「ホームレス」という言葉で表現されている。



子どもたちと「ホームレス」が出会う生命の授業 ～ホームレスの「生きる」に、感性が揺り動かされる子どもたち～

事例 かつてガードマンとして働いていた鈴木安造さん(64歳)は、脳梗塞で倒れた後、ホームレスに。段ボールを集めて生計を立てている。リヤカーに満載した段ボールの価格は190円。1個45円のインスタントラーメン2個が1日の食事。そんな鈴木さんを少年たちが暴行して額をエアガンで襲った。しかし、警察は取りあわない。

北村 この鈴木さん取材した「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」の教材ビデオを中高生に見せて話をしました。襲撃する少年たちは、「ホームレスは社会の屑のような存在、弱い人間は生きる価値なんかない」と言う。生徒たちは「鈴木さんは弱い人じゃない、強い人だ」「自分の悩みなんか小さい」と「ホームレス」の生き抜く強さに驚くんです。そして、生徒たちは野宿者への共感・理解を深める一方で、襲撃する子の気持ちも分かるというのです。

事例 元ホームレス者の話。自分で何とか生きていこうと頑張ったけどだめだった。「もう死ぬしかない」。でも怖くて死ぬこともできなかった。ふらふら状態でさまよっていたら、誰かが救急車を呼んで助けてくれ、気が付いたら病院のベッドの上。看護師さんやお医者さんが診てくれる。役所の人も来て生活保護の手続きをしてくれる。その時思った。助けてくれる人がいるんだ。「助けてくれ」と言えた日が「助かった」日だった。

奥田 北九州市小倉北区の学校をとおして呼び掛け、集まった20人の子供たちとホームレスから自立した男性との

交流の場をつくりました。「君たちも助けてほしい時は助けて!」と言えはいいんだよ」と子どもたちに伝えると、子どもたち自身、毎日とても頑張っているから、その言葉が心に響くんです。小学4～5年生が対象でしたが、この言葉に子どもたちの感じるころは大きいものがありました。

北村 多分どんなになつても、生きるということをあきらめない。不完全でもみつともなくても、炊き出しに並んでも、生きていくたくましさ。「弱いままで生きる」という強さを持つているホームレスから学ぶことがたくさんあります。「可哀そうだから助けてあげる」ではなく、「自分がそういう状態になったら」と想像してほしい。

田中 ホームレスは怠け者だという捉え方をしている人が少なくありません。そんな中で何を訴えていくか。物質的には豊かだけど、子どもは幸せなのかと、悩んでいるお母さんも多い。生き抜くことを教えることは大事。「助け合い支えあう」、そう呼びかけていきたい。

北村 そのためには、まずは出会うこと、意識を変えるには出会うことです。出会ったら、昨日までの無関心な「通行人の私」ではなくります。

奥田 「支援」とは、出会いからはじまります。出会うこと、学ぶことで自分のあり方が変わる。同時に「私の問題」だということに気づく。これは「自分に対する支援」、将来的な自分につながる支援なんです。

ホームレス問題を考える

5

子どもたちはなぜ、ホームレス者を襲撃す ～ホームレスを生み出す社会の問題

大人だって、子どもだって、つらい…今を生きるって



北村 横浜の事件の被害者須藤さんの家業は餅屋さん。夫婦で支えあつて切り盛りしていたのに、ある年の初めに過労で奥さんが亡くなり、そこから人生が変わっていったんです。最愛の妻が心の支えだった。誰にでも「心の支え」が必要、「この人のために生きていく」という気持ちが必要。となると人は脆く崩れます。

奥田 北九州大学が行った調査があります。自分が社会にとって必要な存在であるか、即ち「自己有用感」に関する調査です。一般市民13%、野宿者16%。しかし、自立後に調べてみると10%まで落ちることが判明しました。自立することによって社会に対する信頼は増すのですが、自己有用感低下する。自分が社会に役立つという感覚の低さに驚きました。「社会」ではなく、「家族」や「子ども」に対する場合の数字はまた違ってくるのではないかと思います。

ますが…。我々の支援が問われていると受け止めています。**北村** 子どもたちのホームレス襲撃の根底には、社会に役立たない者は抹殺してもいい、大人も叱らないと思つていま。警察さえも「そこに寝ていようあんたが悪い」と言う。だからホームレスを襲つても捕まるはずはないのだとも。一方、学校では存在価値に優劣をつけるスクールカーストという階級制度が子どもたちの中に格差をつくつています。その子どもの心の奥に「成績が下がると価値のない人間になる」「躰くことは許されない」という強迫観念があることも事実です。そんな子どものストレスが刃となつて自分より弱い者へ向くのです。

奥田 以前、支援機構のホームページに書き込みがありました。「生産性のない人間が迫害を受けたり差別されるのは当然だ、そこに下手に餌を与えたりするから、屑にな



左から北村年子さん、奥田知志さん、田中



る」。襲撃事件の背景には、「生産性」という自己有用感の根拠をめぐる切迫感があるのではないかと思います。これが社会を縛り付けている。

北村 先日、たまたま熊本で乗りあわせたタクシーの運転手さんが上野でホームレスをしていたという人でした。ホテルの支配人にまで上り詰めたものの、パブルがはじけ突然解雇、ホームレスに。ある日、上野のベンチに座つていて自分を探しに上京していた両親が目の前に立つていた。みつともなくて田舎には帰れなかったのだと話してくれました。実家があつてもホームレスになったり、自殺するのは圧倒的に男性が多い。これは日本特有の家族長制の悲劇です。

奥田 今の社会に蔓延している新自由主義の自己責任論と安心・安全論というの大きい問題があります。自分のことしか守らない社会ではなく、それを普遍化することが大事。

田中 グリーンコープでも食べものの安心・安全を言っていますが、その根底にあるのは「生命」です。生命を守る運動は食べものだけではなく、「生きる」すべてに貫かれています。私たちはそれを、グリーンコープの中だけでではなく、地域の中に根付かせていくことをめざしています。

抱樸館は

生きていく場所づくり

北村 子育ては家族だけではできません。近所のおばさんやおじさんなど「道親さん」に見守つてもらつてはじめて、子どもは一人前になるのです。お母さんも自分ひとりで頑張らないで、地域の「道親さん」を頼つてほしいものです。

奥田 必要なのは、北村さんの言う「道親さん」の概念です。多くの野宿者が無縁仏で葬られているが、少なくとも支援機構では、支援者という家族が看取ります。地縁血縁を越えて関係があつた人たちは、涙を流してその人の死を受け入れます。旧来の家族を越えて、誰でもどこでもホームになれる、家族になれる。そんな創造性を持ちたい。

北村 悲しい、苦しい、つらいが言えず、生きていくのがつらい時に弱い者に向くのだから、つらさを分けあうホームづくりが必要です。子どもも親も負の感情を出せることなくでなくてはなりませんね。

奥田 本来は人を押しのけて

椅子を取りあうのが椅子取りゲーム(競争ゲーム)ですが、逆に誰もあぶれることなく椅子に座れるようにするためにどうすればいいのか、というゲーム(協力ゲーム)を子どもたちとします。すると、少なくとも生きていく椅子に子どもたちはお互いにしがみつこうに座る。そのようすは、まさにワークシェアリング、助けあいです。

田中 いじめもホームレス問題も、生命が危険に晒されていることがつらいですね。誰の生命も大事にされなければなりません。生命を原点にした運動は今や「抱樸館」をとおして地域の創出へと向かつていこうとしています。

奥田 これまでの地域は地縁血縁の世界だった。それを越える地域、そんな地域の枠組みの中で子どもたちをどう育てるか、そこで「抱樸館」がどういう役割をするのか、真剣に向きあっていきたい。それが私たちの課題です。





グリーンコープの店舗

地域の中にグリーンコープを

発信する拠点

グリーンコープの店舗の足どり

グリーンコープの前身生協は、旧ふくおか生協（現グリーンコープ生協ふくおか）など一部を除き、ほとんどが共同購入型の生協だった。その中のいくつかの生協では、グリーンコープ設立以前に、野菜の青空市場や地域活動をしてきた組合員などが中心になり、共同購入を補完するための小さな店舗が誕生していった。共生社生協くまもと（現グリーンコープ生協くまもと）

では、1985年頃、地区で活動していた組合員たちが団地の中で、廃業となったうどん屋の6坪しかないスペースを利用してお店を開いた。「生協では1週間に一度しか注文できない。最低限の必需品でいいから、商品が欲しい時にいつでも手に入れたらいい。ならば、自分たちでそういう場所を作ろう」。自分たちの生活のため、小さなお店だったが、なんと1日平均20万円を売り上げていたという。これが店舗ワーカーズの先駆けになったと言われている。

1988年グリーンコープ連合設立後、社会環境の変化の中で、組合員の生活スタイルの多様化に伴い、共同購入だけでなく店舗の必要性も強く意識されるようになった。そのような中で、組合員の求める店舗とは、「地域の中でグリーンコープの店舗はどうあるべきか」という議論がグリーンコープの内部で行われた。

2000年にグリーンコープ店舗政策が確認され、それに沿った店舗作りがスタート。その時点で、売り場面積60坪以上の小型店が9店、40坪以下のミニ店が31店であった。現在は、32店舗（グリーンコープやまぐち生協に1店・グリーンコープ生協ふくおかに21店・グリーンコープ生協くまもとに5店・グリーンコープ生協おおいに4店・グリーンコープかごしま生協に1店、店舗組合員は6万454人）となっている。

「グリーンコープの安心で安全、すべてにこだわりのある商品を、誰もが手にとつて見ることができ、欲しいと思う時にすぐに手に入る。グリーンコープ運動を語ることができ、働くことは大きな生きがい」。店舗ワーカーズとして日々邁進する久留米南町店の店長吉田さん、しものせき店の店長山根さん、平成さくら通り店の店長北島さんは、共通した思いを持っている。グリーンコープの店舗は、組合員活動を経験し、グリーンコープの商品や運動に精通したワーカーズ組織が、グリーンコープから業務委託を受けて運営している。

それぞれの特性を生かして

グリーンコープの店舗は、規模や立地などによって、生鮮品の取り扱いや併設施設などに違いがある。

久留米南町店やみずまき店などは、ワーカーズが製パンや魚や肉のさばきなど、インスタ加工を行っている。ミニ店舗でも、鮮魚や惣菜を取り扱っているところもある。平成さくら通り店やしものせき店は惣菜に力を入れている。また福祉用品店舗やデイサービス・子育てのためのフリースペースなどを併設している店舗配送センター内にある店舗など、さまざまある。

店舗の惣菜はグリーンコープの素材を使い、すべて手作りで。家族に食べさせる気持ちそのままに、コロッケやお弁当などの惣菜もていねいに作られている。しものせき店では鯨カツなど、その地域ならではの食材も生かされている。青果は、無農薬や減農薬の野菜が、地域の産直生産者からも届けられ、朝採れ野菜や共同購入で企画されている規格外の人参なども取り扱う。久留米南町店の青果コーナーではじゃがいもや玉ねぎも2・3個〜1kgと組合員のニーズに合わせている。



久留米南町店



自慢のパンコーナー。豊富なアイテムが組合員に人気



店長 吉田 真由美さん

COEXしものせき店

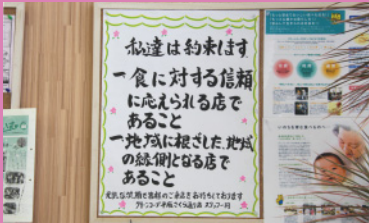


理事会の確認をもとに雑誌や本なども取り扱っている



店長 山根 映子さん

平成さくら通り店



グリーンコープの中で一番新しい店舗。ていねいにワーカーズの熱い思いを店内に掲示。みんなで作るお店をめざす



店長 北島 すみ子さん

店舗の惣菜はグリーンコープの素材を使い、すべて手作りで。家族に食べさせる気持ちそのままに、コロッケやお弁当などの惣菜もていねいに作られている。しものせき店では鯨カツなど、その地域ならではの食材も生かされている。青果は、無農薬や減農薬の野菜が、地域の産直生産者からも届けられ、朝採れ野菜や共同購入で企画されている規格外の人参なども取り扱う。久留米南町店の青果コーナーではじゃがいもや玉ねぎも2・3個〜1kgと組合員のニーズに合わせている。

「組合員は、葉っぱマーク（栽培基準）や品質表示にも敏感です。規格外の人参なども、きちんと説明を表示すれば、よく売れます」と担当のワーカーは話す。鮮魚を扱っている店舗では鮮度を落とさないように手早く捌く。新鮮な刺身は自慢の商品、組合員にも好評だ。また精肉を扱っているところでは、アイテムを増やすなど工夫している。パン作りが好きでワーカーになったというパン部門のワーカーもおり、久留米南町店では、人気の焼き立て食パンを毎日90斤以上焼く。

もっとイキイキと地域に生きる

グリーンコープのこだわりで満たした店舗だが未曾有の不況の影響も受け、特に昨年の10月以降、経営は厳しい。地域に根ざし、地域に広がる店舗となるために、地区の組合員活動の拠点としても、これまで以上に連携を深めていくことが検討されている。また、店舗組合員の拡大や未利用者への働きかけなども課題だ。

グリーンコープの店舗が地域の中で、グリーンコープ運動の発信拠点、また地域の人々のコミュニケーションの場になっていくという夢を広げ実現できる可能性は大きい。

広がる「民衆交易(ネグロス)バナナ」の栽培

～「生きるため」から「自立するため」へ～

バイス村の生産者と出荷前のバナナ

バナナが収穫できない間、とにかく家の周辺で育てた有機野菜(ココナッツ、ショウガ、サトイモ)や炭などを、地元の市場に売って生活した。毎日の米代に加えて、高校や大学に通う子どもたちの教育費が大変だった。昨年からは再びバナナが収穫できるようになった。安定した収入が得られることに生産者は喜んでいる。バイス村へは兼重さんが好きでよく通っていた



▲ありし日の兼重専務とネグロスの子どもたち (1992年2月)

1986年、世界的な砂糖価格の暴落で飢餓の島となったフィリピン・ネグロス島。あれから20余年、現地ではバナナを中心とした循環型有機農業の確立がすすむと共に、それに携わる民衆が農民として自立できるようになってきました。そのネグロスの人々の自立を応援し、共に生きることをグリーンコープはめざしてきました。

ネグロスバナナの民衆交易の端緒となった生産者組織BGA(バランゴンバナナ生産者協会)のようすやバナナ産地の広がりをご紹介します。

ネ

グロスバナナの民衆交易が試行錯誤の末、本格的にスタートしたのは1989年10月。日本に輸出するバナナは、山に自生するバランゴン種。それを株分けして、植えられるだけ植えました。するとバナナは瞬く間に実りました。貧困に苦しむネグロスの人々にとって、バナナを日本へ輸出することによって得られる現金収入はとても魅力的なもの。念願だった1日3度の食事にもすぐに食べられるようになり、子どもたちは学校に通えるようになりました。

クキゾウムシも悲しいのだよ

病虫害で全滅したバナナ山を何とかしようと、バナナ生産者からは、「病虫害を焼き払おう」「農薬を撒こう」という案が出ました。しかし、バナナ山の病虫害発生は、利益を求めてバナナを植えすぎたことによって、山の生態系を崩したことが原因です。それを指摘したのが当時のグリーンコープ連合専務理事だった故兼重さんでした。その時の言葉が「クキゾウムシも悲しいのだよ」。山に棲む虫とも共生しあいながら山の恩恵をいただく、「自然との共生」をネグロスの人々は経験したのでした。

広がるバナナの民衆交易

これまでバナナの出荷ができなかった生産者グループBGAから、2年前からバナナが少しずつ出荷できるようになってきました。その産地の一つバイス村からは、現在毎週1000、1300kgものバナナの出荷が可能になりました。ウィルス全滅できている状況ではありませんが、あの時兼重さんから教えてもらった「自然との共生」の理念が生産者の中にしっかりと根付き、きちんとした対策が施されています。また、生産者も世代が交代し、今では若い人たちが中心になって運営されるまでになりました。

バナナの民衆交易のはじまりを共に担ったBGAは、今なおその先駆者として、

他のバナナ生産者らの心の支えとなって、頑張り続けています。BGA代表のピポットさんは、バナナ生産者を含む「ネグロス有機農業連盟」の監査役にもなっているのだと言います。

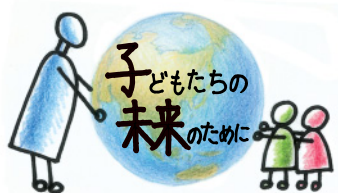
フィリピン、とりわけネグロスは台風の通り道。そのため、バナナの出荷が不安定になりがちでした。しかし、今や、産地もネグロス島からボホール島、バナオ島、ルソン島、ミンダナオ島へ広がり、バナナの民衆交易の輪は大きなつながりへと発展してきています。

「民衆交易(ネグロス)バナナ」を利用するという組合員一人ひとりの小さなアクションが、ネグロスやフィリピンの人々の自立を応援し、「安心・安全」なバナナを育ててきたのです。

現在、現地ではたくさんバナナが栽培され、順調に育っています。夏はバナナの利用が減少する時期ですが、いろんな食べ方を工夫して、頑張っているバナナ生産者を、応援していきましょう。

飲むバランゴンバナナ酢

バナナの有効利用のために、ネグロスをはじめとするフィリピンの「安心・安全」なバランゴンバナナは、時間をかけて日本に届けられます。しかし、そのすべてが使われるわけではなく、廃棄率は5、10%。そのロスバナナの一部は、ホームレス支援に使われますが、さらに残りのロスバナナを捨てないで有効に利用できないかと考えました。そして、登場したのが「飲むバランゴンバナナ酢」です。製造しているのは、グリーンコープの酢のメーカー(株)庄分酢。日本の350年の伝統の技とフィリピンのバナナが出会った、どこにもないバナナ酢です。しかもネグロス島のマスコバド糖で作った黒みつが配合された、とても飲みやすいドリンク酢です。バナナと合わせて利用しましょう。



No.13

原子力発電について考えてみませんか?

私たちの生活に電気は不可欠ですが、便利さを求め電気に頼り過ぎていないでしょうか? 資源に乏しい日本が、「代替りのエネルギー」として利用している原子力発電は、本当に必要なものなのでしょうか? 原子力発電の仕組みは火力発電と原理は同じです。どちらもタービンを動かして電気を出します。その時の蒸気の取り方が違うだけです。火力発電は石油や石炭、天然ガスを燃やして蒸気タービンを回します。原子力発電は原子炉の中でウランやプルトニウムの核分裂により、その熱で蒸気をつくりタービンを回します。原爆と原子炉の違いは瞬間的かゆっくりかの違いであって核分裂であることは同じです。また、ウランやプルトニウムがすべてエネルギーに変わるわけではなく、放射能を含む廃棄物が出てしまいます。それ以外にも放射能を含んだ冷却水が排出され、周辺海域の海水温上昇の原因ともなっています。空や海を汚染してまで原子力発電を推進し進める必要があるのでしょうか? 私たちの子どもたちには核のゴミを託せません。未来の子どもたちが安心して暮らせるために私たちにできることを立ち止まって考えてみませんか?

グリーンコープ共同体組織委員会

投稿募集

私の好きな
グリーンコープ商品

●400字程度
●A4切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX・Eメールでお送りください。
掲載分には図書カード500円分進呈。
●住所氏名などの組合員の個人情報には、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多中央街8-36
グリーンコープコミュニティセンター
フーカース連(R・E・N)
「共生の時代」編集部宛
FAX 092-4481178 76
Eメールアドレス
rikoho@greencoop.or.jp

あせらず、あきらめず、 確かな一歩を



若者の自立支援に取り組むメンバー（前右が武宮さん）

いま地域を考える

No.192

大分市でニートや引きこもりと言われる若者の自立支援活動が続けている「NPO法人KHJ大分若者自立支援の会ステップ」（以下ステップ）。活動拠点となっている大分市郊外のマンションの1室「居場所ほっとハウス」を訪ね、立ち上げ時から参加している武宮律子さん（グリーンコープ生協おおいた組合員）をはじめ、メンバーに話を聞いた。

NPO法人KHJ 大分若者自立支援の会 ステップ



現在、「居場所ほっとハウス」は2年前、支援者の協力で大分市千歳へ移動。グリーンコープ福祉活動組合員基金からの助成でそろえたパソコンなどが整備され快適な空間となっている。開設日は毎週1日（金の午後）。来所の場合は要連絡



広報を担当している若菜さん。大分県青少年自立支援センターで電話や面談による引きこもり相談も受けている

「ニートや引きこもりと言われ、社会への適応が難しい若者は、現在全国で50万人とも100万人とも言われている。「ニート」とは働かず、学校にも行っていない15歳〜34歳の独身者、「引きこもり」は自宅に6ヵ月以上こもった状態を言う。いじめや不登校、失業などのトラブルに遭遇し心の健康を損なってしまうケースが多いと言われる。しかし、若者たちが家に引きこもるようになった具体的な理由や経過はまちまち、それぞれの思いを抱えて社会に身をおくことから遠ざかってしまった。引きこもりの若者たちを持つ親の多くは「子どもがこうなったのは自分の子育てが間違っていたのではない」と苦しむ。そして誰にも相談できず、子どもや子どもに起こっていること自体を受け入れられず、親までも家にこもってしまうことが多い。「ステップ」のはじまりはまず親たちの集まる場所作りからだった。

「若者自立支援の会」へ

出合いのきっかけは、2000年に大分県精神保健福祉センターが主催した「引きこもり家族教室」だった。講座に集まった人たちの中から自然発生的に声があがった。「この悩みを持つのは自分たち家族だけではなかった」という思いに連帯場所となった。

その後、会代表の松本太郎さんを中心に家族同士の自助グループ「ひきこもり親の会」が発足。月1回勉強会を続ける中、全国的なネットワークがあることも知った。しだいに親が胸に秘めた苦しみを吐露できる場所となった。

2003年、「ひきこもり親の会」の通称を「ステップ」とした。若者が自立へのステップを踏み出してほしいという思いを込めた。2005年には大分市の宗方に古い民家を借りて「居場所ほっとハウス」をオープン。同時に会の名称を「若者自立支援の会」に変更した。会員同士交流する中で家庭内にも変化が生まれ、若者自らが動き出すケースも出てきた。2006年にはNPO法人を取得し、若者の自立支援活動をさらに発展させた。

「そのとき」は必ず訪れる

人とのコミュニケーション



月に1回、会報の発送作業をする

感が生まれたのだった。その場所から遠ざかってしまいう若者は「電気ブレーカーが落ちた」状態に似ているという。すぐさま安全装置が作動している状態が引きこもって身を守ろうとする姿なのだと。その状態が続くと、孤独と絶望感に押しつぶされそうになる。人と交わりたいと部屋から出ようとするが、簡単ではなく勇気もある。

一般にニートや引きこもりと呼ばれる若者たちは就労意欲がないと見られがちだ。しかし、ゆっくり自分のペースで環境を整えていければ、人とかかわりを取り戻し仕事にも戻れるという。「少しずつです、ほんとに少しずつ、根気強く働きかけ」そのとき「を待つだけです」と、「ステップ」の広報担当として活動する若菜洋樹さんは言う。

若菜さんは今年31歳。自身に引きこもりの経験があるから、当事者と支援者の両方の気持ち分かる。「ス

ンがうまく取れず、人がいる場所から遠ざかってしまいう若者は「電気ブレーカーが落ちた」状態に似ているという。すぐさま安全装置が作動している状態が引きこもって身を守ろうとする姿なのだと。その状態が続くと、孤独と絶望感に押しつぶされそうになる。人と交わりたいと部屋から出ようとするが、簡単ではなく勇気もある。

居場所づくり

「ステップ」は現在会員が約40人、月に1回会報を発行し、会の活動を内外に報せている。「若者たちを陽がさす場所に引っ張り出すこと」を共通の合言葉に積極的に活動している。「居場所ほっとハウス」を現在の場所に移して2年経った頃から、若者たちも少しずつやってくるようになった。訪れる若者は毎回5〜8人。ギターなど楽器で音楽を楽しんだり、DVDを一緒に見たり、近況報告をしたり、のんびりと過ごす。会話の中から職業訓練に有効な情報を得ることもある。

毎回訪れるという若者の一人は、「人と会うのが怖くて外に出なくなり、日々何とかしたいと思いながらもできずに苦しみました。「ステップ」の活動を聞き、勇気を奮って訪ねてみると、

またまた居あわせた人と趣味の音楽の話が合ったんですよね。ずっと気持ちが和みました」と笑みをもらす。人を癒すのは、やはり人なのだ。

共に生きていくために

「ステップ」は現在、大分市の市民農園の一角を借り、野菜や花を植える試みをしている。また、活動の一つとして、園芸療法の専門家と連携して今後はハウス栽培の道を模索し、将来的には収入につながるようになればいいと思っている。

「当事者は若者だけでなく支援する親たちもまた、お互いを支援しあう『当事者』なのです」と武宮さんは語る。「ステップ」は、若者が単純に引きこもりやニートという状態を脱することを目的とするのではなく、親も子も自らがどう生きていくかを問いかける場として、新しい世界を創り出していくパワーを静かに育てている。

2009年6月の組合員数 405962人

(6/26現在)

リユース リサイクル データ 2009年5月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドパック
回収本数 854,883本 回収率 99.6%	回収本数 218,688本 回収率 58.4%	回収重量 13,437kg 回収率 64.5%	回収重量 34,570kg 回収率 86.7%

(4月19日～5月16日回収分)

放射能汚染測定結果報告(189) 2009年5月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※	昆布	北海道	ND	ND	ND
※	バター	北海道	ND	ND	ND
※	牛乳	熊本県	ND	ND	ND
※	ごま油	ミャンマー、タンザニア、パキスタン	ND	ND	ND